

聞き書きの意味

崎山正美

1. 山内エコクラブの取り組み



杉本さんからの聞き取り風景

2012年7月20日から23日まで滋賀県甲賀市土山町山内地区において地元山内エコクラブと糸満市字米須のあすなろ子供会の交流事業が開催されました。これは自治総合センターの移住・交流促進事業助成によるものです。米須と山内地区では同じように「村丸ごと生活博物館」の取り組みが行われています。この取り組みの特徴は、地域の人々自身の「あるもの探しとその磨きだし」による地域の魅力の発見と地域の再生にあります。

山内と米須の取り組みは偶然にも同じ方向性を歩んできました。ないものねだりではなくあるものの意味を理解しようと山内では村の名人発掘と子供たちによるお年寄りからの「聞き書き」おこなっています。また、米須では、村の由緒ある場所を訪ね記録する活動や、お年寄りの一代記の記録等を行ってきました。

今回の山内での交流事業では、米須の子供たちを交えて数グループに分かれて村の古老からの聞き取りを行いました。私が同行したグループは杉本さんを訪ねました。聞き取りの主な項目はおおむね次の通りです。

- ①若いころどのような仕事をしていたか
- ②昔はどのような動物がいたか
- ③楽しいことは何だったか
- ④将来の村はどうなってほしいか

子供たちの質問はその大きな項目から入り、さらに細かな質問に派生していきます。ねらいは、昔の暮らしの実態と時代の変化の理由を知り、さらに今の暮らしの問題点を理解したうえで将来はこうありたいとのビジョンの形成です。

農水省の関係機関では、10年以上前から「全国聞き書き甲子園」を開催し、高校生による全国の海や川の名人からの聞き書き活動を支援しています。聞き書きは、市町村史や字史などの編集などにも広く用いられている手法ですが、今の時代になって「聞き書き」による記録活動はより重要な意味を持っています。

戦争が終わって、日本の社会は価値観や暮らしの形態が大きく変化してしまいました。その激動の時代の狭間を生きてきた戦前・戦中・終戦直後の世代の体験は、現在の若い世代には想像しがたいものです。それは一口には言い難いもののあえて言うなれば「自然との共生」と「混乱の中で生きる力」にあるものと考えます。

例えば糸満の漁師たちは、戦前南はシンガポール、オーストラリアのアラフラ海、南洋諸島、北は対馬あたりまでを漁場とし、戦後は香港と沖縄を結ぶ密貿易を行い、それが落ち着くと沿岸漁業と南洋方面への遠洋漁業に変わっていきました。しかし、その記録はあまりにも少ない。戦争体験を記録する努力は積み重ねられてきましたが、暮らしの記録が少なすぎるのが残念でなりません。

糸満に限らず、沖縄の人々は激動する時代の荒波に揉まれながら生きてきました。一人びとりの生きざまを聞き書きによって記録編集するとかつての活気ある町がみずみずしく蘇ってきそうです。しかし、曖昧な右肩上がりの未来を志向する社会はそんなことには目もくれなかったというのが大方の状況でありました。

平和な社会に歩いていくには、あのむごい戦争体験の記録とともに、沖縄の人々がどのように生きてきたのかを後世に伝えるのも大切なことだと考えています。そうでなければ、沖縄の未来は展望し難いものになると思われてなりません。

2. 水俣病資料館と琵琶湖博物館



琵琶湖博物館における沖島の暮らしの展示

日本では戦後、沖縄では復帰後、経済成長を目指してまい進してきました。その結果には光と影の両面があります。特に環境や地域コミュニティに及ぼした影響は大きい。この問題の解決にあたっては、連綿と続く人々の生活史からあるべき暮らしの在り方を考えていくのが重要だと思っています。

水俣市の水俣病資料館の展示は、日本人はいかにして環境と共生してきたか各地の事例紹介から始まります。そこには宮古島市の狩俣の人々の自然への敬虔な姿勢も紹介されています。これまで傷つけてきた自然を回復させ、暮らしの影の部分に希望の灯りをともすには、過去の暮らし方を再度見つめ未来に投影させていくことが重要であると伝えているようです。水俣市の吉本哲郎さんはこれを次のように表現しました。

「ピッチャーはボールを投げようとするとき一旦静かに後ろを振り返り、力をためて前にスピードをつけて投げる」。要するに未来は過去を見ることによって展望できるということを言っています。

その手段の一つとして「聞き書き」があります。これは何も子供だけの活動手段ではありません。琵琶湖博物館は、国内だけでなく国外の研究者にも名を知られた日本が誇る博物館の一つですが、ここでの展示の軸は「聞き書き」にあると私は理解しています。その取り組みは現滋賀県知事「嘉田由紀子」さん達が研究員時代に行ったものでした。

3. 聞き書きによる未来の展望



水質保全の取り組みは農家でも行われている

琵琶湖は関西の水ガメですが高度経済成長期から深刻な水の汚濁が進行してきました。そのような社会状況の中で1984年に第1回世界湖沼会議が滋賀県で開催され、これを契機として市民の水環境への関心が高まりました。滋賀県では合成洗剤追放運動や洗剤を使わずに食器の汚れをとる特殊な布巾も開発されてきました。そのような努力の積み重ねとして琵琶湖の水質は少しずつ改善に向かっているようです。

今回の山内交流プログラムには田んぼの生き物の観察がありました。その前に聞き取りをした杉本さんの話では、戦前の田んぼにはカエル、フナ、ドジョウ、ウナギ、ナマズ、タニシ、サワガニ、ヤゴ、ミズスマシ、ゲンゴロウなどたくさんの生き物が棲んでいたが戦後、農薬や除草剤を使用した頃からこれらの生き物は田んぼから姿を消したと言います。今、全国各地の農村では地域活性化の手段としてグリーンツーリズムやエコツーリズムの取り組みが盛んですが、これらのツーリズムは単に農村に客を迎えることをいうことではないはずです。グリーンやエコが表そうとするものには「豊かな生命」との触れ合いがありそうです。戦後の日本の農村から多くの生命が消えていき、人々も村を去り蓄積されてきた祭祀や暮らしの形は見えなくなりつつあります。その失われた

ものを今日的に取り戻し暮らしやすい村を築き上げようとするのがこれらのツーリズムの思想であると思います。

農村を訪れる人々に農村の自然の豊かさを味わってもらおうにも消えた自然は一朝一夕には戻ってきません。最初に取り組むべきことは過去の農村はどうだったのかを知りこれから築き上げていく目標像を明確にすることが重要で、それはまさに「聞き書き」から得られます。今、滋賀県では食の安全と豊かな農村の再生に向けて「環境こだわり農作物栽培ほ場」の普及を行っています。そんな努力の積み上げによって生命輝く農村が展望できるのではないのでしょうか。

近年、佐渡のトキ、豊岡のコウノトリの繁殖成功の朗報が伝えられています。この成功の裏には繁殖地の周りでの有機農業の推進が功を奏しているのではないかと勝手に想像します。トキやコウノトリが自力で生息していくにはどのような食物連鎖が必要とされるのかその視点からの環境づくりが大事だと思います。

4. 鍋家さんが伝えたいこと



囲炉裏と行燈の薄明りのもとで話を聞く

さて、3日目の夜のプログラムは、鍋家さんというまちの郷土史家のお宅で話を聞くことになりました。鍋家さんは、家のすべての電気を消し蝋燭の灯りだけで私たちを迎えてくれました。話は、闇の中の灯りのありがたさに始まり、食べることは生命を頂く

ということであり、食べ物を粗末にしてはならないことと、食物連鎖の重要性を分かりやすく子供たちに話します。蝋燭の明りの中で子供たちは自然に鍋家さんに視線と耳がいきます。話の合間の静寂の中に今では懐かしい柱時計の「ボ～ン～ン」という鈍い音が突然薄明りの空間に鳴り響くと「ウッー」と子供が飛び上がったのには思わず笑ってしまいました。

鍋家さんはお見かけするところ 70 歳代。その世代ならではの体験からもたらされた話の内容でした。しかし、鍋家さんに限らず誰も永遠に語り続けることはできません。ここでも「聞き書き」による伝えることの重要性を感じた次第です。

5. 泥んこサッカー



泥んこサッカーは寒かった！

3 日目は、沖縄では珍しい田んぼでの泥んこサッカーが行われました。小雨まじりのあいにくの天気で肌寒い中にも関わらず子どもたちは水着で田んぼに入って行きました。農薬や除草剤をまき散らした田んぼではできないことです。村では、都市からやってくる子どもたちのために農薬や除草剤を散布しない田んぼを準備してくれていたのです。泥んこサッカーが終わると近くの河原で協力者の面々が用意してくれた簡易シャワー室で泥を洗い落とし、川の一部をせき止めた溜まりでビワコマスの手づかみ競争と

なり、その後ビワコマスは子供たちの腹の中に収まりました。

その夜、鍋家さんは大切な生命を無駄なく頂くことを「収めます」と表現すると教えてくれました。意外にも子どもたちは、そのことをしっかりと聞いていて言葉の意味を良く理解していました。エコツーリズムやグリーンツーリズムが成立していくには、生命の循環の理解にもとづく生命あふれる農村づくりが重要だということが、この泥んこサッカーからも読み取れます。

聞き書きは、私たち現代人が置き去りにしてきた「先人が築き上げてきた共生の知恵」を再発見する大事な取り組みであることを再認識した滋賀県甲賀市土山町山内エコクラブとの交流でした。

8月の中旬には山内エコクラブを米須に迎えます。山内の子供たちは、米須の子供たちと共に何を発見していくのでしょうか。そして大人たちは何を伝え、未来の展望をどう指し示すのでしょうか。楽しみです。